

P-133

思春期におけるHealth Literacyとインターネット・デジタル依存に関する国内外の文献レビュー

橋本 美穂¹⁾、平塚 克洋²⁾¹⁾横浜市立大学 医学部 看護学科、²⁾昭和大学 保健医療学部 看護学科

【背景】インターネットやデジタル機器の普及により、健康に関する情報入手が容易となった一方で、思春期のデジタル依存は依然として深刻な問題である。そこで、入手した情報を正しく判断する上で重要な能力であるHealth Literacy (HL)とデジタル依存に着目した。

【目的】思春期のHLとデジタル依存に関する文献を概観し、思春期のHLを活用した情報行動の今後の課題を明らかにする。

【方法】PubMed、医学中央雑誌Web版、CiNiiを用いて、文献を検索した。キーワードは「ヘルスリテラシー/Health Literacy」「思春期/adolescents」「デジタル依存/テクノロジー依存/Digital Addiction/Technology Addiction」等を組み合わせ、検索期間は2014年～2024年、日本語または英語で出版された文献を選定した。文献を精読してマトリックス表を作成し、著者、表題、掲載雑誌、研究目的、研究方法、HL尺度、デジタル依存の種類を抽出し、分析した。分析の妥当性を確保するために、研究者2名が独立して項目抽出を行い、結果を整理した。

【結果】PubMed8件、医学中央雑誌5件、CiNii 2件の全15件を分析対象とした。海外論文では、HLとデジタル依存の関連を調査した論文が最も多かった。国内論文では、HLとデジタル依存の関連の他、HLと情報行動に関する教育について報告されていた。デジタル依存の種類は、インターネット、携帯電話、ソーシャルメディア等、多様であった。多くの論文が、健康な思春期を対象としており、疾患のある思春期のHLに関する論文は1件であった。HLとデジタル依存は負の相関関係にあることが報告され、家族によるサポートや社会的支援が、HLとデジタル依存の負の相関関係を緩和することも報告されていた。HL教育に関する論文は1件で、HLに関連する思考スキルをターゲットとした複数の授業（教育モデル）の効果を検証していた。

【結論】健康な思春期においても、HLの低下とデジタル依存の関連が着目され、思春期のHLをリスクと捉える国際的な傾向が明らかになった。一方で、気軽に適切なデジタル端末の利用、適切な情報の活用は、疾患の有無に関わらず、思春期の健康に不可欠であり、家族や社会的支援を整え、思春期のHLを資産 (asset) として強化する重要性が示唆された。

P-134

中高校生が考える「ありのままの自分」とは

三浦 巧也¹⁾、橋本 創一²⁾¹⁾東京農工大学大学院 工学研究院、²⁾東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター

【目的】自尊感情において重要な概念である「ありのままの自分」について、現代の中高校生がどのように捉えているのかを、テキストマイニングを用いて明確にすることを目的とした。【方法】2024年7月から8月に調査を実施した。調査に協力した中高校生は60名であった。なお、本研究では、学校長、保護者、本人から同意を得て実施した。調査対象者に、「ありのままの自分とは」という質問をし、自由な意見を求めた。KH Coder 3 (Higuchi, 2016) を用いた共起ネットワーク分析を行った。手順として、語の最小出現数を2に設定し、共起関係数50の設定で絞り込んだ。共起ネットワーク図は、語同士のJaccard係数を算出し、線として描画された。なお、KWICコンコーダンス画面を開き、例外的な記述がないこと、共起した語同士は同様の文脈で用いられていることを確認しながら解釈を行った（本研究では、出現数最小2、文書数最小1、Jaccard係数上位50と設定した）。【結果】分析の結果、中高校生全体から「ありのままの自分」とは、8つのカテゴリーに分類することができた。具体的には、「思ったことを素直に言える」、「他人の意見に流されない」、「素の自分が出せる」、「嘘をつかない」、「自分の意志で行動する」、「マイペースに過ごす」、「自分自身をさらけ出す」、「その場の環境に適応する」といったカテゴリーが抽出された。また、中学生のみにみられる特徴として、「自分のことが好きである」、「嘘をつかない」、「分からない」というカテゴリーが抽出された。高校生のみにみられる特徴として、「他人の意見に流されない」、「遠慮や我慢をせずに伝える」というカテゴリーが抽出された。男子生徒のみにみられる特徴として、「正直な姿を見せる」というカテゴリーが抽出された。女子生徒のみにみられる特徴として、「自分の意志で行動する」というカテゴリーが抽出された。【考察】中高校生が考える「ありのままの自分」には、中学生と高校生では相違がみられた。特に高校生になると、人が介在する（対人関係）語りが多いことが示唆された。また、性別ごとにも相違があり、男子生徒は自分自身を主語として語られることが多く、女子生徒は他者との関わりについて語られることが示唆された。それぞれの発達段階や性別に分けて理解をすることが重要であることが示唆された。